

ヒサカキの新たな病害「枝葉枯れ症状」の防除技術

[分類] 普及 [所属名] 林業試験場 特用林産部

[研究期間]

令和4～6年度

[背景とねらい]

本県のヒサカキは国内有数の生産量を誇っています。しかし、平成28年頃からヒサカキの枝葉が枯れ上がる病害「枝葉枯れ症状」が発生し(図1)、急速に県内全域に拡大しています。現在、登録農薬がなく、有効な防除対策もないため産地では大きな問題となっています。そこで、早急に防除対策を講じるべく、発生消長など病害の特徴を把握し、薬剤散布による防除技術の確立に取り組みました。



図1 ヒサカキ「枝葉枯れ症状」

[研究の成果]

1. 「枝葉枯れ症状」は、森林総合研究所で新種の病害として同定作業が進められており、病名は未定です。枝の下部から上部に向けて枝葉が枯れ上がり、落葉せずしばらく残るのが特徴です。被害が進むと樹勢が衰え、枯死に至ります(図1)。
2. 発生時期は、5月下旬から10月下旬であり、梅雨時期に発病することがわかりました。また、人工気象器内での試験において、10～30℃で菌糸が伸長し、特に25℃が最も活発に伸長したことから、野外での発生時期が菌の生育に好適な条件であることが確認されました。(図2)。
3. 10種類の薬剤の中から、ベンレート水和剤(商品名:ベンレート水和剤)とトリフルミゾール水和剤(商品名:トリフミン水和剤)について発病初期(5月下旬)から7日間隔で6回及び5回散布を行う薬剤効果試験を実施した結果、それぞれの防除価(薬剤の防除効果を示す基準)が95以上となり、高い効果が認められました(図3)。
4. より効率的な薬剤散布方法として、散布間隔を開け、散布回数を減らす試験(①10日間隔・3回散布 ②14日間隔・2回散布)を行った結果、いずれも前述の試験よりも防除価が低くなり、感染拡大も見られました(図4)。結果、十分な防除効果を得るためにはベンレート水和剤は7日間隔で6回、トリフミン水和剤は7日間隔で5回散布することが必要と考えられます。
5. また、手入れ不足でヒサカキの枝葉が込み合い、風通しの悪い栽培地で多く発生する傾向があったため、罹病枝葉の除去と施業管理(間伐、断幹、整枝など)を行った上で、薬剤散布を行うことで、さらに防除効果が高まります。

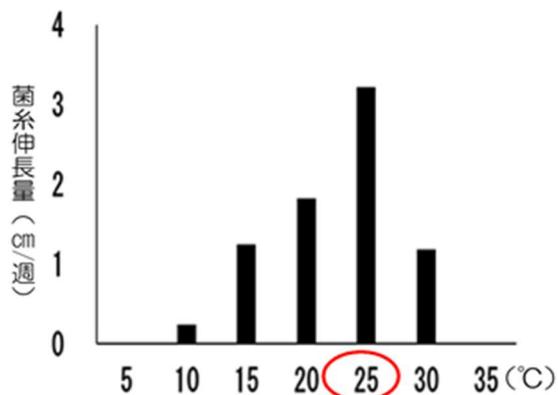


図2 各温度別の菌糸伸長量
(人工気象器内での試験)

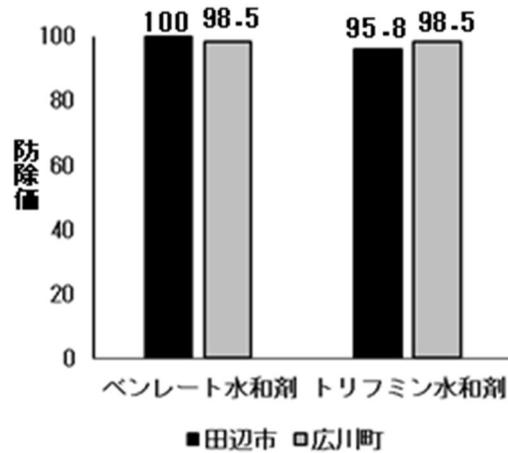


図3 薬剤効果試験 (令和5年実施)
※ベンレート水和剤7日間・6回散布
トリフミン水和剤7日間・5回散布

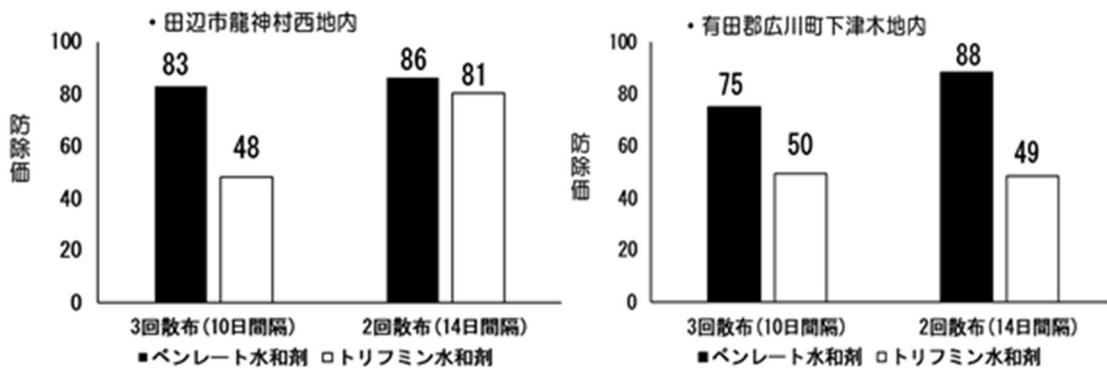


図4 薬剤効果試験 (令和5年実施)
①10日間隔・3回散布 ②14日間隔・2回散布

[成果のポイントと活用]

1. 防除薬剤として、ベンレート水和剤、トリフミン水和剤が有効であることから、現在、その結果を薬剤メーカーに提供し、農薬登録へ向けた申請手続きを促しています。
2. 防除方法は、5月下旬頃の発生初期から7日間隔でベンレート水和剤(希釈倍数:2000倍)は6回、トリフミン水和剤(希釈倍数:2000倍)は5回散布することが効果的です。
3. 罹病枝葉の除去と施業管理を行った上で、薬剤散布を行うことで、さらに高い防除効果が期待できることから、農薬登録が認可され次第「ヒサカキ『枝葉枯れ症状』防除マニュアル」を作成します。

[その他]

予算区分: 県単(農林水産業競争力アップ技術開発事業) 問い合わせ先 TEL:0739-47-2468